

若いレーニンの歴史と経済認識にふれて

桂木, 健次

<https://doi.org/10.15017/2999993>

出版情報 : 経済論究. 28, pp.39-56, 1972-06. 九州大学大学院経済学会
バージョン :
権利関係 :



若いレーニンの歴史と経済認識にふれて

桂 木 健 次

はじめに

マルクスの歴史認識の核心が、資本主義的生産様式の支配する近代市民社会と世界市場、そこに成立する普遍的諸個人による共同的占有の共産主義的世界への条件という処にあると⁽¹⁾すれば、レーニンにおける歴史認識の核心は、帝国主義的世界市場の中で先進諸国に対抗しえない後進的・非西欧的(アジア的)社会というロシアの展望を見る⁽²⁾ということであった。世界史の帝国主義的な段階への移行過程ははじまるまっただ中のロシア社会の「資本主義化」が、ロシアの勤労人民に一体なにを用意するのか、ロシア・プロレタリアートは自らの運命をどのようにみつめうるのか——こうした、〈世界とロシア〉の関係は、レーニンをはじめ、1890年代のロシア知識人の歴史意識の本質的な問題をなしていたのである。ロシアのマルクス主義は、それ自体が段階認識をはらむ普遍的理論として成立をとげるのではあるが、このロシア社会の諸条件に直面することを通して、特殊個性たる理論的性格を受けとっている。こうした両義性においてレーニンの歴史認識を把握することが必要であると思う。

これまで、ロシアのマルクス主義は次のように考察されてきた。プレハーノフ達の世代の思想移行(1880年代)に即して、源流としての社会革命主義ナロードニチエストヴオから社会民主主義的マルクス主義への移行が、1880年代に基本的におわり、社会革命主義への批判(「人民主義」批判)が科学的に理論的内容を獲得した、と(ロマン主義への科学的批判)。これについては、田中真晴、保田氏等々が近年の研究で部分的補修をほどこして、1880年代のマルクス主義と社会革命主義(「人民主義」)に関して新資料を紹介している⁽³⁾が、プレハーノフの世代にロシア

のマルクス主義が理論的に成立したことが強調される結果になり、ロシアのマルクス主義に占めるレーニンの位置と関係が解明しされてはいないのである。

また、社会革命主義の問題は、西欧の資本主義と社会主義理論（社会民主主義的マルクス主義）への対応における問題をはらんでおり、さらには、後進的・アジア的共同体社会における非資本主義的発展の可能性を予見的に示唆しているのである⁽⁵⁾。後の件は、とくに中国文化大革命にみられる20世紀後半の第三世界（社会）における革命の現実問題からてらしみた場合、古典的な社会進化論的な資本主義必然論を超克しようとした社会革命主義のアプローチに、科学的理論としてはさておき、歴史認識の問題としては決してあなどりがたい内容を萌芽的に含んでいたのではなかろうか⁽⁶⁾。

また、若いレーニンが社会革命主義（《人民の意思》派）の諸サークルに所属していたという史料が解明され、1890年代初頭の革命的マルクス主義者N・フェドセーエフがロシアのマルクス主義に占める特異な位置とレーニンへの影響が研究されるに従って、社会革命主義とロシアのマルクス主義の関係史（論争史）は、レーニンの歴史認識の根底を明示するのである。本論は、1890年代のレーニンの歴史認識を以上の視座から明らかにし、マルクスの歴史認識との対照を通してその両義的意味内容を示したい。

- (1) マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』、マルクス『要綱』など。
- (2) 和田春樹「レーニンの世界史認識」（『世界歴史』別巻）。
- (3) 田中真晴『ロシア経済思想史』保田考一『ミール共同体とロシア革命』
- (4) A. Waliski, *The Controversy over Capitalism*. Oxford, 1969.
- (5) R. Pipes, *Young Lenin* (ed. *Revolutionary Russia*, Harvard, 1968).
- (6) 後進ロシア的動機から国際主義的、西欧的な理論（マルクスの理論）を学び、それを民族主義的、ロシア的目的に用いるという後進国社会主義のパラドックスについては、M. Meisner, *Li Ta-chao and the Origins of Chinese Marxism*, Harvard Univ. 1967（邦訳あり）参照。

1. 社会革命主義もしくは「人民主義」の概念

(1) 近年の諸研究から

「人民主義」「ナロードニキ主義」という概念で知られるロシアの社会革命主

義（1870、80年代の社会主義で、1890年代に社会民主主義的マルクス主義との論争で都市知識人、労働者では敗北するが20世紀に貧農の切取地と共同耕作地の奪還運動を社会基盤に復活した）については、実に多く異なった意味合いがあるので、語義上の問題研究から整理しておきたい。

これまでの語義的研究では、ソ連邦のボリス・ゴズミンの「ロシアにおけるブルジョア民主主義段階のナロードニチェストヴォ」(歴史学誌, vol. 115, 1959)が指導的地位を占め、西欧ではアメリカの R. バイプスの論文⁽¹⁾ならびにポーランドの A. ワリスキの前掲論文が卓抜の研究業績とされよう。ゴズミンの業績は、ガラクチノフ・ニカンドロフ⁽²⁾とともに、従来の「人民主義」と呼ばれる社会革命主義に対するマルクス主義の偏見と公正さを欠いた取り扱い、わずかにしか省りみられていなかった研究状況を、レーニンの立場からの逸脱にあると批判的に総括し、レーニンの理論の源流に遡って研究することを提言したところにある⁽³⁾。つまり、これまでは、「人民主義」に対するレーニンの批判的側面だけが強調され、レーニンがこの革命思潮に歴史的意義を認識していたことが看過されてしまっている、というのである⁽⁴⁾。従来の解釈基準は、1860年代の啓蒙主義を「革命的民主主義」と定義し、1890年代以降の「人民主義」にはもっぱら「思想的だ落」を見てとり、「人民主義」の思想と革命運動を過少評価するもので、レーニンの論義も、この文脈で整理したものであった⁽⁵⁾。

だが、ゴズミンのこうした指摘は、レーニンの「人民主義」規定の再構成がもついま一つの面、つまり、レーニンが1860年代の「遺産」(チェルヌイシェフスキー)とそれへの「人民主義者」の「付加」の間に明らかに区分をおいたことをみのがしているのである。ゴズミンの整理に従えば、レーニンは別に、1860年代の啓蒙主義とそれ以降の「人民主義」の区分を絶対的なものとみとておらず、啓蒙主義はまた同時に「人民主義」でもあったことになる⁽⁶⁾。このゴズミンの評価に対してはワリスキの批判がある。彼は、このゴズミンの評価はただチェルヌイシェフスキーの場合にだけ該当するが、1860年代と「人民主義」の間には、ロシアの資本主義化と農民共同体の歴史認識で決定的な違いがあ

り、チェルヌイシェフスキーといえども、共同体の擁護をロシア資本主義の発達と両立しないとは思わず、ロシアに対する西欧の全面的な優位性をみていた、と指摘する⁽⁷⁾。そして、レーニンはたしかに、チェルヌイシェフスキーと彼の「人民主義的な」弟子たち（古典的「人民主義」者）の間の区分を、啓蒙主義と経済学的ロマン主義のカテゴリーで区別して分析していたのである⁽⁸⁾。

ところでパイプスの研究は、広く理解されているように「マルクス主義的な意味」で、ロシアの非資本主義的発展の理論に立つ運動イデオロギーという定義をしりぞけ、むしろ歴史的な意味合いからみれば、「人民主義」と呼ばれる運動原理は、大衆ヘゲモニーの第一義性に立つ運動イデオロギーにあるということを示している⁽⁹⁾。またパイプスは、1870年代と1880年代の社会主義運動の研究に基づいて、「人民主義」か、マルクス主義かの定義は、マルクスに従うか否かにあるのではなく、どのマルクスに従うかという論争が1890年代におこなわれることによる「分類」された運動原理の定義付けである、という。つまり、『資本論』のマルクスか、ザスーリッチ宛の手紙などで『資本論』の適用歴史範域を西欧的市民社会に限定し、ロシアについての言明を行っているマルクスか、いずれに従うかということに基づいている、と。⁽¹⁰⁾

だが、このパイプスの定義もまた一面的であり、「独自の道」の理論をもつ運動イデオロギーが全て「人民主義」と言えないにしても、「独自の道」の理論に立ちつつも大衆のヘゲモニーの第一義性を遵守した社会革命主義的社会主義と定義しうるであろう。この面で、ワリスキの研究は参考になる。彼はパイプスがしりぞけた方の定義づけを厳密にする方向で、パイプスのいま一つの評価の定義づけ（大衆ヘゲモニーの第一義性）の歴史的研究を参考しつつ、レーニンの概念規定にあくまで即そうとしている。つまり、現実にロシアに存続した思想の一つの広い流れ、つまり「独自の道」、資本主義的発展の回避もしくはその発展の不可能性をロシアに見て、資本主義の進展で没落しつつある小独立生産者、農民の利害に立ち、資本主義化への抵抗と封建的搾取形式の廃止を同時要求する運動原理であるが故に、大衆ヘゲモニーの主要性は自らこの定義を含むという見解である⁽¹¹⁾。

ところが、周知のように、1880年代以降の「人民主義」の内部には、都市知識人の間にテロルの先鋭的攻撃性を生み出すと共に、合法的、自由主義的な傾向を生み出してもいる。これと同じことは、社会民主主義的マルクス主義の内部にも、革命的マルクス主義（《人民の意思》派から移行しつつある過渡期のマルクス主義）のグループ——フェドセーエフ、レーニンの世代——が、社会主義の先進的部分との共同性、共通性を持ち、在外社会民主主義者や大学社会民主主義者の流れ（プレハーノフやストルヴェに代表される）と合流し対立しはじめていた。これは、パイプスとワリスキの研究によって詳細に資料づけられている⁽¹²⁾。ここに、レーニン主義的なロシア・マルクス主義の源流ともいえる状況が生れたといえるであろう。

(2) レーニンの「人民主義」批判とロシア社会思想史の位置づけ

レーニンの「人民主義」にかんする定義づけは、コズミンやニカンドロフがいち早く指摘したように多義的である。ゲルツェン追悼論文でレーニンは、19世紀ロシアの三つの主な革命世代=時代をあげた。(1) 貴族、(2) 雑階級知識人ラズノチーネツ（チェルヌイシェフスキー→《人民の意思》派）、(3) プロレタリアートである。この(2)の世代と時代に該当する、「ゲルツェンにはじまりダニエルソンに終る世界観の全体」「ロシアの農民民主主義派のイデオロギー（見解の体系）」という広義の意味が、レーニンのおおむねの立場であったようである。レーニンによれば、この「人民主義」の現実的内容と社会的意義とは、「農民民主主義」にあり、ロシアの自由主義が「農奴主と資本家の間の特権の分割」を目指す際に、一切の「特権の廃止」を目指す事を余儀なからしめたロシアのブルジョワ民主主義派のイデオロギーであるということである⁽¹³⁾。

しかし他方でレーニンは、「人民主義」をロシア一国に限定せず、後進国民民主主義ブルジョワジーに共通の一種の類型カテゴリーで考えてもいた（例えば、「中国の民主主義と人民主義者」論文で、孫文の思想が人民主義的であると規定している⁽¹⁴⁾）。

つまりレーニンは、ロシアの「人民主義」と呼ばれる社会主義を、移行の時

代に後進諸社会に出現した貧農の特徴的な階級的立場を反映し、指導的機能を果たす民主主義インテリゲンツィアに定式化された運動原理のロシア版であると規定づけていたと言えよう⁽¹⁵⁾。つまり、ロシアに於る資本主義発展との関連で、①ロシア国内での資本主義化に対応する原理的反映（大規模な資本主義的生産と直面した小生産者の諸問題の反映）であるとともに、②また、ロシアの経済的発展が手おくれの状況に立たされていたのと不可欠的に、西欧の資本主義的経済社会とそこに生み出された社会主義思想のいずれに対しても反応でもある。後者の意味では、「人民主義」的社会主義は、西欧の社会主義の一（主な）思想、カール・マルクスの理論との出会いと反応（その逆の関係も含めて）の問題でもあり⁽¹⁶⁾、レーニンの「人民主義」についての諸々の言明も、こうした二つの面での意味合いから再構成的に把握することが必要であろう。

レーニンの「人民主義」概念そのものに関して、なお次の点が注目されてしかるべきである。

①レーニンは、「60年代の遺産」（チェルヌイシェフスキー）と70年代の古典的な「人民主義」とを区分し、その関係を論じている⁽¹⁷⁾。

②この古典的「人民主義」と80年、90年代の「真の人民主義」の区分⁽¹⁸⁾。（この概念のあいまいさについては、パイプスの批判的研究が注目されよう⁽¹⁹⁾。）

なお、ここでは、＜リカード・シスモンディ＞論争の展開上に位置づけた、レーニンの「人民主義」批判がある⁽²⁰⁾。

結局、「人民主義」は前方と後方を向いた二つの顔を持つ、小ブル的でユートピア的な経済関係という前資本主義型の理念化であるという立場に立って、レーニンは「人民主義」批判を展開してはいるが、他面では、啓蒙主義と違って資本主義的発展に内在する悲劇的な矛盾を認めており、この面では啓蒙主義（チェルヌイシェフスキー）よりも前進を遂げた民主主義的思想原理であるとレーニンは言っている⁽²¹⁾。とはいえやはり、レーニンの評価は啓蒙主義にやや力が重い。例えば、論説「経済学的ロマン主義の特徴付けによせて」の該当部分⁽²²⁾。レーニンには、後述のカール・マルクスの（またチェルヌイシェフスキーが直

覚していた⁽²³⁾ 歴史三段階論的の把握が欠けていたのである。従って彼は、マルクスのシスモンディ批判の歴史認識的の基点を必ずしも理解しえるところには立っていなかったし、マルクスのロシアへの関わりの意味も当時の理解能力の外にあったと思われる。これについてはワリスキの指摘を参照しうる⁽²⁴⁾。

(1) R. Pipes, *Narodnichestvo* ; A Semantic Inquiry, "Slavic Review, 1964.

(2) ガラクチノフ・ニカンドロフ『ロシア・ナロードニキのイデオロギー』(小西訳、現代思潮社)。

(3)(4) B. P. Koz'min, *Iz istorii revoliutsionoi mysli v Possii*, P. 640. A. Walicki, *ibid.*, p. 6.

(5) A. Walicki, *ibid.*, p. 17. (6) 同,

(7)(8) A. Walicki, p. 19—21.

(9) R. Pipes, *ibid.*, p. 441—2, 453.

(10) R. Pipes, *Struve, Liberal on the Left, 1870—1905*, Cambridge, 1970. の第2, 3章。R. Pipes, *Social Democracy and the Petersburg Labor Movement, 1885—1897*, Harvard, 1963, の邦訳(『レーニン主義の起源』河出書房刊)の日本語版序文、訳者(拙稿)あとがきを参照。

(11) A. Walicki, *ibid.*, p. 3.

(12) R. Pipes, *Young Lenin*, p. 41—52 ; A. Walicki, *ibid.*, p. 165—179.

(13) レーニン『全集』第18巻, 506—561頁。

(14) レーニン『全集』18巻, 164頁以下。

(15) 同上, A. Walicki, *ibid.*, p. 9.

(16) A. Walicki, p. 25.

(17)(18) レーニン『全集』第2巻, 502, 512頁。

(19) R. Pipes, *Narodnichestvo*, p. 453.

(20) レーニン『全集』第2巻, 204頁。

(21) 同, 515, 524—526頁。

(22) 同, 198—213頁。

(23) A. Walicki, *ibid.*, p. 13.

(24) 同, 170—194頁。

2. 若いレーニンと「人民主義」

(1) 1890年論争の意義

ロシア・マルクス主義の父がプレハーノフであるとすれば、ロシア内地の

1890年代の急進インテリゲンツィアにとって、社会民主主義的マルクス主義はP. ストルーヴェによってはじめられた⁽¹⁾。ストルーヴェはその後ベルンシュタイン修正主義のロシア的亜種、つまり合法的マルクス主義の思想原理を純化し、自由主義左派として20世紀ロシア社会思想の舞台を飾るのであるが。P. ストルーヴェはその思想原理においては親カント的、社会ダーウィン主義にあり⁽²⁾、マルクスのそれとは全く異質ではあるが、運動原理として社会民主主義的マルクス主義をとったのである⁽³⁾。こうした事情は、ブレハーノフが1880年代にN. ジーベルの「デ・リカードとカール・マルクス」(1885年)論文でマルクス理論を学びはじめたという事情と共に、ロシア・マルクス主義の黎明期に特有の思想情況のいま一つの顔(「人民主義」的社会革命主義と並んで)である。こうした論理は、ワリスキがN. ジーベルの研究に沿ってまとめたことによると、次のとおりである。社会生活の諸形態を自然的発展の必然的帰結にみ、資本主義の局面を通過する必然性を経済的発展の一般的法則、進化法則として説明する。従って、資本主義的工業化にともなう弊害を工場法などで防止することは可能ではあっても、資本主義が自ら清算する成熟以前に、資本主義の一掃を考えることは出来ない。この過程は飛びこすことも短縮も不可能なのである。従って、農民共同体は崩壊の宿命にあり、大半のロシア貧農のプロレタリアート化と隷属化は、経済的発展の必要条件でもある⁽⁵⁾。

こうした論理が、「人民主義」の思想原理の「主観的方法」への批判を意図したものではあれ⁽⁶⁾、急進派知識人の受け入れがたいものを持っていたことは事実である。マルクス主義の内部でも、レーニンのストルーヴェ批評に見られるように不満を表明してはいるが、対「人民主義」論陣の内部批判として寛大な評価がなされている⁽⁷⁾。

当時のロシア・マルクス主義の合流点は、1898年ミンスク党大会「宣言」に象徴されよう(なお宣言草稿はストルーヴェの筆になる)。V. アキモフが残した証言⁽⁸⁾によると、このストルーヴェの草案はレーニンたちの《ペテルブルグ労働者階級解放闘争同盟》に強力な支持を受けている。経済斗争をロシア当面

の緊急な革命斗争課題と主張する《ブント》系のクレーマーの反対もあって書きあらためられた「宣言」は、経済的斗争と工業ストライキの意義を認め、プロレタリアートの第一義的課題を「政治的自由」の獲得においた⁽⁹⁾。そしてこの課題は、党機関紙グループによって、「人民主義」の伝統の固持に基づく社会民主主義と「人民主義」（《人民の意思》党）との「同盟」として提唱されなければならないと注文をつけられていた⁽¹⁰⁾。このように、「宣言」は、革命的マルクス主義が、経済斗争を重視するのちの経済主義、政治的自由主義への傾斜を萌芽するのちの修正主義、並びに自由主義左派との、1890年代をわかち合った政綱であったのだ。従って、「宣言」は、プロレタリアートの主導性という問題を政治権力奪取の課題と関連づけるということになっておらず、筆者のストルーヴェ自身は「自分は論理の途で社会主義者になったのであり、マルクスの理論はユートピア的である」と断言しているのである⁽¹¹⁾。

1890年代のロシア内地のマルクス主義理論が、社会主義に資本主義批判を見るのでなく資本主義そのものの発展の必然的帰結を見たストルーヴェに導かれていた。この思想情況の特異さは、在外にあってプレハーノフが説明したように、ちょうど西欧での古典派経済学が果たしたと同じ役割を、ロシア社会思想の中に社会民主主義的マルクス主義の一分岐が占めることによって、ロシアではブルジョワジーの西欧化という課題さえもがマルクス主義の旗の下に伴なわれていたという歴史内容を示しているのであろう⁽¹²⁾。

勿論、社会民主主義的マルクス主義がロシアでは、マルクスの意に反して、農民の分解と隷属化の歴史的弁護人、上昇期のブルジョワジーの理論代表となつているという「人民主義者」ミハイロフスキーの告発は、その非論理的理論内容にかかわらず、一部のマルクス主義者には真正面から受けとめられていた。つまり、かれらはマルクスの経済学説を受け入れる（『資本論』に論理的に従う）が、プレハーノフの政治政綱（エルフルト綱領に定式化された社会民主主義的マルクス主義の見地に立ち、民主主義と社会主義の結合、政治的自由をロシア革命の政綱として掲げた1883年《労働解放》団綱領）が、ロシアの実

情課題に適応していると考えず、政治的自由、代議制ではなくてテロルと権力の奪取を掲げる部分である。南ロシアのフェドセーフ・グループを典型とする過渡期マルクス主義者であり、ペテルブルグではラドチェンコ・グループであった。フェドセーフによると、社会民主主義者は「人民主義」への反対者ではなく、革命的「人民主義」の生きた伝統を継続し、新しいロシアの状況に適応した理論の再構成をマルクスの学説に求めている。そして、ロシアの革命は第一の任務を農民に61年改革の切取地を返し、より多くの耕作地を与え、これ以上の農民の隷属化とプロレタリアート化を阻止する政策をかけることにあるとみた⁽¹³⁾。フェドセーフがミハイロフスキーにあてた手紙では、彼のグループが「合法」マルクス主義との無縁を述べている⁽¹⁴⁾。とはいえ、こうしたフェドセーフたちもまた、ミハイロフスキーたちとの間に論争したことは事実である⁽¹⁵⁾。なおレーニンは、死の直前、フェドセーフについて一筆し、こうした1890年代の世代がロシア・マルクス主義に占める位置を総括している⁽¹⁶⁾。レーニンを含めて、マルクス主義に移行しつつあった当の世代の典型であったと述べている。

(2) レーニンの形跡

この面の研究で、パイプスの研究は補うべき諸事実を提供してくれる。レーニンは、1887年から1893年にかけて青春期に、三回ほど《人民の意思》派のサークルに加盟した形跡が残されている⁽¹⁷⁾。しかも、同派の急進的部分、ジャコバン派に所属していた。初めは1878年秋カザン大学でラザール・ポゴラスの指導するグループ。同グループは《人民の意思》組織の再建とアレクサンドル三世の暗殺ということを主旨に、ペテルブルグと連携をもっていたが、12月の学園運動で壊滅、レーニンも投獄されている。2度目はカザン大学にもどった1888年秋にマリヤ・チェトヴェルゴヴァの指導するサークル。同組織は、《人民の意志》組織の全国的再建を目指すM. L. サブナエフの組織網のカザン支部で、通諜により全員逮捕された（レーニンは直前にサマラに去る。当時カザンにはフェドセーフのマルクス主義者グループが組織されていた⁽¹⁸⁾）。3度目

はサマラの地でスクリヤレンコのサークルに加盟（1899年末）。M. ブラン（セメノフ）の証言によると、同組織はミハイロフスキーとヴォロンツォフの思想原理に立ち⁽¹⁹⁾、他都市の《人民の意思》派と連携を持った。また、レーニンは、N. S. ドルコフのような1860年代の急進的異端ネチャーエフと親交あるジャコバンの社会革命主義者とも接触を保っていた⁽²⁰⁾。だがレーニンは、こうしたサマラの思想情況に身をおくとともに、フェドセエフたちとの交通をとおして革命的、過渡期マルクス主義への途を歩み始めていたのである⁽²¹⁾。

レーニンの社会民主主義的マルクス主義への移行の時期は、1892年、おそくとも1893年末から1895年中葉（訪欧、マルトフ達のヴィリナ・グループとの同盟）の頃であり、フェドセエフとの思想交流を媒介にした過渡的なマルクス主義の思想原理に立って、ストルーヴェに指導される社会民主主義派の合流点へ到達したのである。この地平は、ストルーヴェはむろん、在外のロシア・マルクス理論の指導者プレハーノフたちとも異っていたようである。つまり、「人民主義」の思想原理を批判し、またロシアの資本主義化を必然的に把握してもいなかった。たしかにレーニンはロシアがすでに資本主義段階に入っている見地に立ってはいた⁽²²⁾。しかも後日に問題指摘されたように、ロシア経済全体ではなく、農業経済資料、1891～2年冬にV. E. ポストニコフが南ロシアで行った農業調査に基づいて、この見地を推論したのである⁽²³⁾。論説「農民生活における新しい経済的動向」でレーニンは、土地所有農民が雇役労働を搾取する小ブルジョアと残りの農民のプロレタリア化という「階級分化」（農民分解）の苦悩のまっただ中に、ロシアの村落が陥っていると見⁽²⁴⁾、「市場問題によせて」では、こうした小ブルジョア化したスクターリ農民が20%を占め、農民の大半は何の蓄えも、十分な生産手段も所有せず、ために貨幣の必要を「賃労働」への出稼ぎに依っていること、農村に於るこうした「非農民化」が商品経済の発展と資本主義の成長の過程が始まりその初期の段階を示しているのであり、他面で都市の巨大な資本主義がこの過程の終りの傾向（労働者の自覚）を示している、と結論づけている⁽²⁵⁾。

レーニンは1892～3年に、ロシア農業経済に生じている諸事実を把握し（この面では社会革命主義派が政綱的視点の制約から単に土地制度に限定し、つい農業全体を考察することをおこたりがちであったことを考えあわせれば、レーニンの視点の確さは相対的にのみ言えるが）、ロシアに於る社会民主主義の実現の可能性を推論したのである。それは次のようにまとめられよう。

①貧農はも早、革命的目的に役立たない。土地所有農民は既に小ブル化し、労働者を雇用し貧しい経営の農民に家内仕事を分け与えており、現状維持的である。従って、農民一般の地位改善を主張、弁護する「人民主義」は反動的でさえある(26)。

②政治的自由はも早不必要、反動的である。民主主義思想から社会主義を分離しなければならない(27)。

③ロシアの労働者は、一切の民主主義的分子の先頭に立って絶対主義を打ち倒し、公然たる共産主義革命に向って、政治斗争のまっすぐな道を歩まねばならない。この条件は、ばらばらの労働者を意識的な階級斗争に転化する諸組織に組織化することにかかっている(28)。

レーニンは、ストルーヴェに代表されるロシア社会民主主義の理論がただロシアの資本主義化の不可避性と必要性を説明するだけに止まり、この過程に特有の階級的敵対の形態を過程の具体的分析としてさし示しえない狭い客観主義的観念論にあると批判し(29)。ロシア資本主義の成熟、従って社会民主主義と自由主義の間の同盟を、ストルーヴェやプレハーノフが言うように必要だとは一時期は考えていなかった(30)。また、「人民主義」は反ブルジョア的であるのではなく、不十分にこの現実生活のブルジョワ化傾向に気づかずに、ブルジョワ的幻想に固執する故に、批判されるべきであること、「人民主義」の綱領条項の中には、ロシアの資本主義への道に伴う経済的發展を促進、機械制工業の發展を促進するような一般民主主義的方策が含まれていることを指摘している(31)。

(1) R. Pipes, Struve, の随所。

(2)(3) R. Pipes, *ibid.*, 第2章を参照。(3)については第3章, 4章も参照。

- (4) A. Walicki, *ibid.*, p.166-7.
- (5) 同, p.166-168.
- (6) R. Pipes, *ibid.*, 第2章, を参照。レーニン『全集』第1巻, p.190-1を参照。「ロシアのマルクス主義者は、まさに従来の社会主義者の主観的方法を批判することから始めた。彼らは、搾取の存在を確認して、それを非難することに満足せずに搾取を説明しようと願った」(p.190)。
- (7) 同上, R. Pipes, *Social Democracy*, p.71.
- (8) J. Frankel, *V. Akimov on the Dilemmas of Russian Marxism, 1895-1903*, Cambridge, 1969.
- (9) なお、「宣言」の全文は、西欧では R. Pipes, *Struve*, p.193-196, でみられる。
- (10) J. Frankel, p.31.
- (11) P. Struve, *My Contacts and Conflicts with Lenin*, *Slavonic Review* vol, xii, 1934. p.577. ; A. Walicki, *ibid.*, p.169.
- (12)
- (13) R. Pipes, *Young Lenin*, p.36 : A. Walicki., *ibid.*, p.170-176.
- (14) A. Walicki, *ibid.*, 173.
- (15) A. Walicki., *ibid.*, 175-176.
- (16) レーニン『全集』第33巻, 471頁。
- (17) R. Pipes., *Young Lenin*, p.23-39.
- (18) R. Pipes, *ibid.*, p.32.
- (19)(20) R. Pipes, *ibid.*, p.34.
- (21) レーニン『全集』第33巻, 471頁。
- (22) レーニンは、サマラで、ポストニコフの調査文献『南ロシアの農民経済』について書評をかき、そこで、農民の分解と貨幣経済の浸透という資料に基づいて、基本的にロシアの資本主義化を「了解」した(レーニン『全集』第1巻)。R. Pipes, *Young Lenin*, p.38. (23) R. Pipes, *ibid.*, p.38.
- (24) レーニン『全集』第1巻, p.5-69.
- (25) レーニン『全集』第1巻, p.73-122.
- (26) レーニン『全集』第1巻, p. 276.
- (27) 同上, p. 310-311.
- (28) 同上, p. 316-318.
- (29) レーニン『全集』第1巻, p. 538.
- (30) レーニン『全集』第1巻, p. 542-545.
- (31) レーニン『全集』, 第1巻, p. 542-545. 1890年代論争にしめるレーニンの特異な位相は、彼が農民問題への深い関心をもちつづけていたことにも基づいているよ

うである。後のメンシェヴィキに走った面々が、ストルーヴェと同様に、農民問題への関心を欠きがちであったのと比べてみるならば、ここにレーニンの政治感覚の特徴は見られる。だが、それは、オプシチーナ、共同体農民の歴史的運動を原理的に把握したものとは必ずしもいえないのである。

3. ま と め

以上のレーニンの歴史認識と「人民主義」批判は、例えばマルクスのザスーリッチ宛手紙(1881年3月8日付)がプレハーノフによってにぎりつぶされていたり、『祖国の思い出』誌宛のマルクスの「ロシアの経済的状態についての手紙」(1879年)を同じプレハーノフ・グループが発行をさしひかえ、《人民の意思》派の機関誌『《人民の意思》の使者』で1886年に発表されたりしていた、ロシア・マルクス主義の当時の支配的状況の中では、特異の位相に立っていたのではあるが、それでもなお、マルクスが示したロシア歴史認識とは相違しており、1894年に「ロシアの社会関係について」の後書を書いたエンゲルスとも違っていた⁽¹⁾。このところを整理し、レーニンの歴史認識の位相、レーニン主義的なロシア・マルクス主義の源流の意義をまとめておこう。マルクスとエンゲルスは、ロシアの社会的運命をめぐる社会民主主義派と「人民主義」派との論争(1880年代)では、「人民主義」派にまじめな支持を与えていた⁽²⁾。1882年に『共産党宣言』のロシア版(プレハーノフ訳)⁽³⁾の序文は、「人民主義」派のラブロフの求めに応じて、当時のマルクスの基本的なロシア歴史認識をさし示している(これはザスーリッチ宛書簡と草稿などで詳述化されるが)。つまり、『宣言』は近代ブルジョワ的所有の不可避的な崩壊が歴史的に迫りはじめたことを宣言することを主旨にしていたのであり、ロシアでは資本主義化(発展しはじめたブルジョワ的土地所有)と並んで同時存在して、土地の大半が農民の共同占有になっていることに注目を促し、次のように述べている。

「そこで問題はこう立てられる。ロシアのオプシチーナ共同体は、たとえそれが原始的な土地共有の著しく崩壊した形態であるとしても、より高度なコンミュニクティブ共同所有の形態に直接移行しうるであろうか。それとも反対に、それ

以前に西欧の歴史的発展に示されるような解体過程をたどらなければならないのか？この問題について今日可能な唯一の解答は、こうである。ロシア革命が西欧のプロレタリア革命の合図になり、こうして両者が相互に補い合うのであれば、現在のロシアの土地共同所有は共産主義的發展の出発点になりうるであろう」(4)。この所見は、高度に発展した諸国ほど革命の機会、条件があることを再確認していると共に、後進的諸国に於ても、経済的發展が世界市場の条件と文化交流の作用をうけて修正されている類型認識を明らかにした(5)。だが、西欧の社会主義の勝利のみが、ロシアの共同体農民に、直接的なコンミュニョン的所有への移行に必要な物質的、政治的諸条件を用意するであろう。共同体的農民のロシアが「社会主義の選良の国民」であるとはマルクスもエンゲルスも断じて言明してはいない。西欧社会主義の援助こそが、ロシアの農民共同体に正常な資本主義的發展の途をよけて、コンミュニョン的所有の土台を用意するであろう(6)。こうした積極的な歴史認識は、ザスーリッチ宛手紙と草稿にみることが出来る。マルクスは、『資本論』の資本主義化全体の基礎づけを耕作者の収奪においたことを明らかに、これがあくまでも西欧諸国に限定して歴史的に証言しうることを述べている(7)。つまり、資本主義の原蓄の西欧的運動は、私有の一形態（自己労働に基づく自己〈私的〉所有）から、私有の他の形態（他人労働の収奪）への転化が問題核心なのであるが、ロシアの共同体農民は反対にいま、共有を私有に転化させることになる(8)、と。この自然成長的發展をおくらせる条件は、ロシアに存在するのである。それは、ロシアがインドとは違って西欧から孤立しておらず、西欧社会主義の諸成果を吸収する外部条件にあるから、ロシアは資本主義的發展の必要と必然性がなく、従ってロシアの資本主義化がロシア専制によって強圧的に支えられていることになっている。従ってロシア専制との闘い、ロシア農民共同体の発達だけが、経済学的見地から見ても、ロシア農業を迷路から脱出しうるといふ(9)。この見地は、ロシア内地ではプレハーノフに対する《人民の意思》派の政綱的立場でもあった。

マルクスの書簡「ロシアの経済的狀態についての手紙」が『《人民の意思》

の使者』誌上で公開された(1886年)際の、ロシア社会民主主義派の反応は知るすべもないが、レーニンが1894年4月に「人民の友とは何か」の第3分冊で示した見解が一つの目安となろう⁽¹⁰⁾。

レーニンは、「マルクスは本質に触れた答を出すことを避けている」とみている⁽¹¹⁾。だが、マルクスは同書簡で、ミハイロフスキーの誤解——ロシア社会民主主義派の誤りの根拠は、マルクスが『資本論』原蓄の章で、一般的な歴史哲学的理論として叙述しているところに在るというミハイロフスキーの理解——に対して、自分はこの章の叙述を西欧の資本主義発展の歴史理論に限定しており、そのように受けとられたのでは辱恥ものだと述べているのである。ミハイロフスキー氏は勝手に「ロシアに関する原理の応用」として、「ロシアが西欧流に資本主義国になるならば、この目的は、ロシアの農民の大部分をプロレタリアートに転化する以外の方法では到達しえない」と言っているが、マルクス自身はこう言った覚えはないと述べている⁽¹²⁾。ところが、レーニンはこのところを読みちがえて、マルクスその人の言明と理解している⁽¹³⁾。

ロシアの「人民主義」は、マルクスとエンゲルスが1857年恐慌によってゆきずまった歴史認識を切り開き、アジア的諸社会への世界市場的＝世界革命的関連の目を開かせたのであるが⁽¹⁴⁾、これについては別の機会で論述したい。(なおエンゲルスは1894年に前述の「あと書」で、「短時日の間に、ロシアに資本主義生産様式の一切の基礎が築かれた。だがロシアの農民共同体の根元にもまた、斧鉞が加えられた」という新見解を示し、ブレハーノフに軍配を上げる⁽¹⁵⁾が、全面的に彼を支持しているのではなく⁽¹⁶⁾、またエンゲルスのドイツ社会民主主義へののめり込みと亡マルクスの視座からの距離が論理的に顕著になっている。これは単に歴史的発展の反映で説明が出来ない問題を含んでいるように思われる⁽¹⁷⁾。

ところでレーニンは、社会民主主義的マルクス主義の論陣に参加するに従って、その特異なロシア・マルクス主義的源流と位相にかかわらず、こうしたマルクスたちの思想原理に立った歴史認識を理解しえないままにいた。レーニン

が共同体農民にたいする注目を深めたのは、理論的には粉碎したはずの社会革命主義が20世紀初頭に息をふきかえした（1901年社会革命党の結成、同党左派による貧農斗争の激化、1906年『トルドヴィキ』議員団の結成）情勢に押されてからである。しかし、例えば1909年末の「ロシア自由主義派の最近の言葉」論文では、農民は反動的階級でなく、また「人民主義」は地主的自由主義的な資本主義に対決して農民民主主義的な資本主義の大衆の小ブルの斗争の理論であるとみた。つまり、社会革命主義はアメリカ型資本主義の理論として、ストライピン体制に対決する進歩的な歴史内容をもっていると見て、『トルドヴィキ』団との同盟を主張している（プレハーノフはカデットの立憲自由主義と同盟を提言）⁽¹⁸⁾。政治的見地からみれば、これはレーニンの初期の「人民主義」と共同体農民に対する評価からの逆転ではある。だが、歴史認識的にはほとんど変わってはいない。レーニン（主義）にとっての源流の中に、ジャコバン派的社会革命主義が、兄アレクサンドルの血を分けて、サマラの思想萌芽の中で、あまりにも深く浸みこんでいたのであろうか。

- (1) A. Walicki, *ibid.*, p. 187 以下, 保田考一, 前掲書, 23—53頁。平田清明の近年の論文も参照。
- (2)(3) 保田, 前掲書, 10—11頁。
- (4) マルクス・エンゲル『共産党宣言』（角川版, 9—10頁）
- (5) A. Walicki, *ibid.*, p. 172—180. 山之内靖『世界史像』275—283頁。
- (6) A. Walicki, p. 183.
- (7)(8) マルクス『資本主義的生産に先行する諸形態』（国民文庫版）, 93—94 頁, 120 頁, 129—130頁。
- (9) マルクス, 同上, 95頁, 101頁, 116頁, 130頁; A. Walicki, *ibid.*, p. 180—181, 188—191頁。
- (10) レーニン『全集』第1巻, 277—279頁。A. Walicki, *ibid.*, p. 185—187.
- (11) レーニン『全集』第1巻, 278頁。
- (12) 同, 279頁, A. Walicki, *ibid.*, p. 187. ワリスキは次のように言っている。「『資本論』に叙述されたような、蓄積過程の内的調和は、もっぱら西欧に適應するのであって、機械的に世界のその他の地域に拡げべきではないのだ。というのは、「…かくのごとく、異なる歴史的條件はきわめて類似の現象を根本的に異った結果に導くものである」（マルクス）からである。展開のそれぞれの形態は、個別的に研

究され、他の形態と比較されるべきである。「一般的な歴史的、哲学的理論、その最高の功績は、いわば超歴史主義に存在するであろう」（マルクス）。こうした理論の形でもって、具体的な歴史発展の科学的な説明は決してできるものであるまい。結局、マルクスの『資本論』が、西欧の場合と異って、よりよい形態になるであろうような発展の途をロシアに見出そうとしているロシア人たちの努力に対しては否定的な立場にあるというようなミハイロフスキーの提言を彼（マルクス）は否定したのである」（p.186—187）。そして次のマルクスの言葉を引用している。「しかしながら、僕（マルクス）の見解を不明瞭にしておくことは、僕の主義ではないので、僕は卒直にこう説明したい。僕は近代ロシアの経済的發展過程を根本的に批判しえんがために、ロシア語を勉強し、数年にわたってこの問題にかんする公文書ならびに印刷してある他の資料を勉強した。僕は今や、次のような結論に到達した。もしロシアが今なお1861年以来入りこんだ進路に止まり、かつその進路について更に前進せんとするならば、事物の進行が、資本主義的苦難の試練を阻止すべく一国民に与えたところの好機会をば失うであろう」（『マルエン選集』）。

(13) レーニン、同上、279頁。

(14) 山之内靖『世界史像』153頁、251—255頁。

(15) 保田考一、前掲書、12頁、A. Walicki, *ibid.*, p. 183.

(16) 「〔その後書きで〕エンゲルスは、共同体の「救済」の可能性はすでにロシア資本主義の発展によって無効になってしまっていると声明した。さらにかれは、この可能性が純粋に理論的に大いにはむしろたがわしいこと、かれは戦術上の理由から主として、共同体の存在を指摘したのであると述べた。「共同体の驚異的な力についての信念は、その当時、ロシアのツァー政権をゆるがせた決断と英気ある英雄的なテロリストを鼓舞したのである。私（エンゲルス）はこうしたテロリストたちがロシアの人民を社会主義革命の選良の国民であると考えたからといって、決して批難することはしない。ただ私はかれらの幻想には責任を負いたいだ」（Cf. *Perepiska. K. Marksa i Engelsa s russkimi politicheskimi deyatelyami*, p. 296）。

(17) マルクスとエンゲルスの史観の不協和はすでに初期『ド・イデア』段階にもみられるのであり、広松渉的にたんにエンゲルス主導説では説明できるものではない。とくにマルクスがいかなる史観として晩年に立っていたかを確認すれば、エンゲルスのドイツ社会民主主義への妥協とは異った方向性がでてくるのではなからうか。世界革命への飛しょう。「九州大学新聞」第640号の拙論を参照。

(18) レーニン『全集』第16巻。なお第13巻も参照。

(追記) この論文は1971年7月広島大での経済学説史学会西南部会での報告の一部である。